

大齋節第5主日  
聖ヨハネによる福音書第11章17～44節  
於：聖パウロ教会 司祭 山口千寿

2011/4/10

大齋節も第5番目の主日を迎え、あと2週間を残すだけとなりました。お気づきになったと思いますが、大齋節に入ってから主としてヨハネの福音書が読まれています。伝統的には、第3主日に4章の「イエスさまとサマリアの女性の対話」、第4主日に9章の「生まれながらの盲人の癒しの物語」、そして今日の11章の「ラザロの甦りの物語」が読まれてきました。これらの箇所は、大齋節中に洗礼の準備をする洗礼志願者に信仰の決断を促すために選ばれています。これらの物語の登場人物とイエスさまとの対話を読むことを通して、わたしたちもまたその対話の中に加わるよう促されます。イエスさまとの対話を重ね、深めて行くことによって、信仰を成長させていただくのです。その実りとして、イエスさまのみ言葉とみ業を通して、わたしたちも闇から光へ、死から命へと移されるようにと招かれているのです。

今日のラザロの甦りの物語では、イエスさまの決定的なみ言葉が語られます。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」弟のラザロを失い、悲嘆に暮れている姉のマルタに対するイエスさまの圧倒的なみ言葉と問いかけです。わたしたちは、この御言葉を聞いて、どのように答えるのでしょうか。なんとお返事をしたら良いのでしょうか。どのような答えが用意できるのでしょうか。

ラザロの2人の姉のマルタとマリアについては、ルカ福音書の美しい物語の中でも読むことができます。イエスさまの一行が宣教をしながら方々を歩いて廻っている時に、ある村に入り、そこでマルタの家に迎え入れられます。マルタはイエスさまをもてなすために甲斐甲斐しく働きます。ところが妹のマリアは、そんな姉の忙しく立ち振る舞っている様子を尻目に、イエスさまの足下に座ってイエスさまのみ言葉に耳を傾けています。少しも姉を手伝おうとしないマリアに、マルタは業を煮やしてイエスさまに訴えます。「少しは手伝いをするように、おっしゃってくださいな」(リビングバイブル)。イエスさまはマルタの言い分を

優しく受け止めて、「マルタよ、マルタよ、」と名前を呼んでいます。そして、「必要なことはただ一つだけである」と、イエスさまに聞くことこそが、人間にとってなくてはならないことだと教えておられます(10:38～)。

この物語の中にも感じ取れることですが、イエスさまはラザロを含めてこの兄弟を愛しておられました。福音書の中では、イエスさまがこの家を訪ねたのは3回だけですが、イエスさまとこの兄弟の親しい間柄を思うと、イエスさまはベタニアの近くを訪れた際には、しばしばこの家を訪問されたのではないのでしょうか。この3人の兄弟の家でくつろいだ時間を過ごすことを喜びとしていたのではないのでしょうか。この兄弟も、イエスさまに厚い信頼を寄せていたように思われます。

今日の物語は、ラザロが重篤な病気だという知らせが、イエスさまのもとにもたらされたところから始まります。しかし、イエスさまはその知らせを受けても、すぐにベタニアの村に向かって行動を起こそうとはなさいません。わざわざラザロが死ぬのを待つかのように、同じところに2日も滞在するのです。そして、「この病気は死で終わるものではない。神の栄光のためである。神の子がそれによって栄光を受けるのである」と言って、ご自分がなさろうとする使命を暗示するのです。死んだラザロを死の眠りから起こすことを、ご自分の務めとして引き受けようとするのです。

イエスさまが、ベタニアから徒歩で1日はかかるヨルダン川の向こう側に滞在していたのは、ユダヤ人がイエスさまを捕らえようとしたからでした。石で打ち殺そうとしたためでした。ラザロを起こすためには、その危険な場所に、再び戻らなければなりません。あえてご自分の身に危険を引き受けても、務めを果たそうとされるのです。ベタニアの村の3人の兄弟を愛しておられたからです。「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」(15:13)と語られたイエスさまです。そのみ言葉を自ら実行されるのです。事実、ユダヤ人の最高法院は、ラザロの甦りの出来事の後、イエスさまを殺そうとたくらむことになりました(15:53)。

イエスさまがラザロのもとを訪ねたのは、墓に葬られてから既に4日も経ってからでした。イエスさまの到着を聞いてマルタは町外れまで迎えに行きますが、自分の気持ちをイエ

スさまに正直にぶつけています。「主よ、もしここにいてくださいましたなら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに。」後からイエスさまのもとに駆けつけたマリアも、同じ言葉でもって弟ラザロを思う気持ちを言い表しています。

2人の姉だけではないでしょう。わたしたち誰もが、愛する人と死によって別れなければならないときに、言いようのない寂しさ、空しさを心の深くに感じますが、その思いがこの言葉には漂っています。独り残されたと思うやるせなさ、切なさをじっと抱えて生きていかなければならない、そんな人生の残酷さに直面したときに口から出てくる言葉です。人は、どうして愛する人たちとの結びつきを断ち切れなければならないのか、という問いでもありましょう。

この言葉に込められた2人の姉の悲しみと嘆きの深さを、イエスさまは真正面から受け止められます。イエスさまの感情があからさまに溢れ出てきています。「心に憤りを覚え、興奮し、涙を流された」とラザロへの愛が描かれています。マルタとマリアの姉妹に対するイエスさまの気持ちでもあつたでしょう。

皆さんは、イエスさまに、ここまで愛され同情されているこの3人の兄弟を羨ましいとは思わないでしょうか。もし、同じ時代に同じところにわたしたちも生きていたら、もしかしたら、イエスさまは、直接、わたしのためにも涙して下さったかもしれないと想像することは楽しいことでしょう。しかし、わたしたちはそのような想像をして終わるのではありません。イエスさまが、わたしたち一人一人の名前を呼んでくださる呼び声に耳を澄ませるのです。イエスさまが、わたしたち一人一人に語りかけてくださるみ言葉を親しく聞くのです。わたしたち一人一人に向けて注がれているイエスさまの愛を、ベタニアの兄弟への愛と同じものとして受け止めるのです。イエスさまの呼びかけに応えて、愛の交わりの中に招かれて行くことが、信仰に生きることです。

先週、わたしの親しくしていただいている方を病院に訪ねました。3月の初めに急性心筋梗塞になって自宅で倒れ、救急車で病院に運ばれました。2週間、意識がなかったそうです。ですから大地震ことも知らないままでした。集中治療室で管をいっぱいつけられ、ご家族がびっくりするような最新の治療法で手当を施されたのですが、3週間経って、や

つと一般病棟に移ることができるようになりました。4週間してお話しすることができるようになり、お訪ねすることが許されました。

元々、細い方ですが、すっかり痩せこけてしまって、入れ歯が合わないためにお話しも良く聞き取れなかったのですが、一般病棟に移ってから、通っている教会の牧師が訪ねてくれたそうです。頭に手を置いて祈ってくれた。その時に、涙がこぼれて来たと言っていました。自分は、親の葬式の時にも涙が出ることはなかったのだけれども、今度は涙が出たとつくづく言っておられました。

どのような思いを込めてお話し下さったのか分かりませんが、その方の信仰生活を思いつつ、わたしなりに受け止めたのは次のようなことでした。

その方が、突然の病を発症し、2週間も3週間も死と隣り合わせになって過ごして来て、やっともう大丈夫と診断されて一般病棟に移って、その時に、ああ自分はもう一度生きるために死から命へと呼び戻されたのだと、そこで実感して感激の涙を流したというのではないのです。後になって教会の牧師が来て、癒しの祈りをしてくれたその時に、死から命に移された喜びを、心の底から感じて涙がこぼれたのです。病院のスタッフの皆さんに対する感謝の気持ちは当然あるでしょう。しかしそれにも増して、神さまの癒しのみ業がご自身の上に行われたと、深く受け止めることができたのではないのでしょうか。それは、「ラザロよ、出てきなさい」と、墓から呼び出すイエスさまの呼びかけを聞くことと同じ体験です。

この体験は、これから先、いつかは死を迎えなければならないとしても、ご自分は神さまに結ばれているという強い確信のもとで、恐れることなく生涯を閉じることができる、そのような道がこの方の前に開かれたことなのではないのでしょうか。

「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる」という、イエスさまの死を圧倒する力強いみ言葉が、この方の中で鳴り響いていることでしょう。「この病は死に至らず」と言われた方が、わたしたちの傍らに常にいてくださり、わたしたちの命をも復活の光で照らしてくださることを知って、希望のうちに勇気をもって毎日の生活を歩んで参りたいと思います。

